

公益財団法人 山階鳥類研究所
要覧



Yamashina Institute for Ornithology

翼にたくす 地球の未来

環境破壊が大きな問題として社会に取り上げられるようになってからかなりの年月が経っています。人類が今後も繁栄を続けていくための前提として、生物多様性を守ることの重要性を多くの人々が知るようになりました。美しい色彩とさえずりで私たちの目を引く鳥たちは、環境の変化にとくに敏感であり、その保全は生態系全体の保全にもつながると期待されています。

山階鳥類研究所は、前身の山階家鳥類標本館の1932（昭和7）年の設立以来、一貫して世界の鳥類学の発展を支えてきました。私たちは今後も鳥たちをより深く理解するため、地道な基礎データの収集に努めつつ、希少種の保全に取り組み、「翼にたくす地球の未来」を合言葉にして、彼らにも人間にもすみやすい地球環境の実現に貢献して行きたいと考えています。



鳥類学の研究拠点

総数8万点超、国内最大の鳥類標本コレクションをはじめとする貴重な資料を保管し、国内外の研究者による研究活動を支援しています。
また、自らも鳥類の多様性に関する基礎研究を進めています。





資料を要とする連携

国内最大の鳥類標本コレクション

研究所には、研究を支えるための資料として、8万点を超える鳥類標本が保管されています。世界に現存する種のおよそ半分をカバーするこの標本コレクションは、鳥類に関するものとしては国内最大で、新しい学術的知見を生み出す源となっています。また、保有する資料と、それに関する知識、技術を活用して関連諸団体との連携を深め、博物館展示の共催などを行っています。



鳥のビオソフィア展（東京大学総合研究博物館での共催展）

鳥のビオソフィア展（東京大学総合研究博物館での共催展）

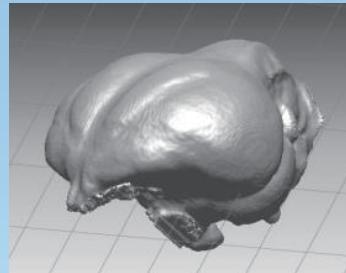


©KOJI OKUMURA / Forward Stroke Inc.



新しい技術で標本を分析する

研究所が管理する標本コレクションは、当研究所の前身である山階家鳥類標本館の時代に集められた資料に、その時々のスタッフの収集品が付け加わってできてきました。長く保存してきたおかげで、いまではそれらの資料が集められた頃には想像もつかなかつたような新しい技術で 標本を分析できるようになっています。私たちもまた、このコレクションをさらに大きくし、最良の状態で次世代に受け継ぎたいと願っています。鳥についての私たちの理解は、これからも新しい技術が生み出されるたび、深まって行くに違いないからです。



脳形状の復元

希少種ヤンバルクイナの頭骨標本をX線CTで撮影し、内部の空洞のかたちから脳形状を復元した（協力：慶應義塾大学荻原研究室・帝京科学大学島田研究室）。



山階家鳥類標本館

かつて渋谷にあった山階家鳥類標本館。1932（昭和7）年設立。大戦末期に焼夷弾の直撃を受けたが全焼を免れ、標本を次世代に受け継ぐことができた。



人々と鳥たちの関わりを見つめ直す

人々と鳥たちのあいだの関係は、かつてはどのようなものだったのでしょうか。そしてそれはいまどのようなもので、今後どう変わっていくのでしょうか。

研究所では、両者の関係を見つめ直し、それをさらによいものへと導くための礎として、人文社会科学の資料も積極的に収集しています。



鳥かごコレクション

江戸から昭和にかけて作られた鳥かご類約100点が保管されている（富山県 黒部市・大田保文氏寄贈）。



版木コレクション▶

戦前の鳥類図鑑に使用された木版画の版木。





鳥の情報センター

研究所は鳥を扱う書籍の収集と維持管理も担っています。私たちの蔵書コレクションは、山階家鳥類標本館の時代から受け継がれてきたもので、総数5万冊を超しています。なかには、19世紀の石版印刷手彩色の書籍など、世界的に希少な書籍も含まれます。

この蔵書コレクションは関連諸団体や研究者に向けて公開されており、鳥についての情報センターの役割を果たしています。例えば、日本鳥学会が 2012年に『日本鳥類目録改訂第7版』を発刊する際には、このコレクションが大いに活用されました。

ジョン・グールド 鳥類図譜

19世紀、イギリスで出版された石版印刷手彩色の図鑑。

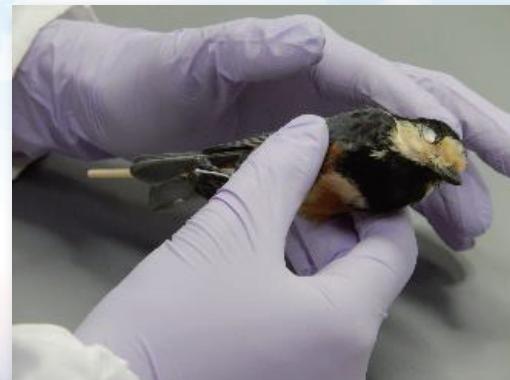


鳥類標本作製技術講習会

研究所では、鳥類標本の作製に長けたスタッフがその技術を自然史博物館のスタッフらに伝えるため、講習会を開催しています。

剥製標本作製の様子

鳥の遺体の腐りやすい部分を取り除き、代わりに綿を入れ、よく乾燥させる。写真は乾燥前に羽毛の乱れを整える様子。よく管理すれば、100年以上先の未来に資料を受け継ぐことができる。



講習会の様子（写真提供：美幌博物館）



長期にわたる野外調査

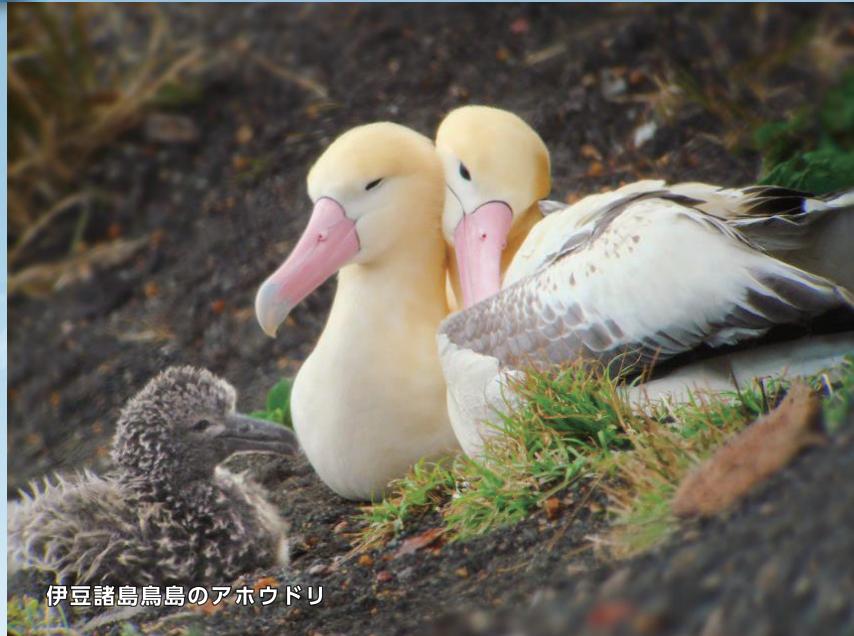
環境省などの機関から委託を受け、野鳥の生息状況に関する野外調査を長期的、継続的に実施しています。





鳥たちを守る活動

行政機関・大学・民間団体などの協力を得ながら、絶滅のおそれがある鳥たちを守り、増やす活動に取り組んでいます。鳥類の保全に関する基礎研究も行っています。

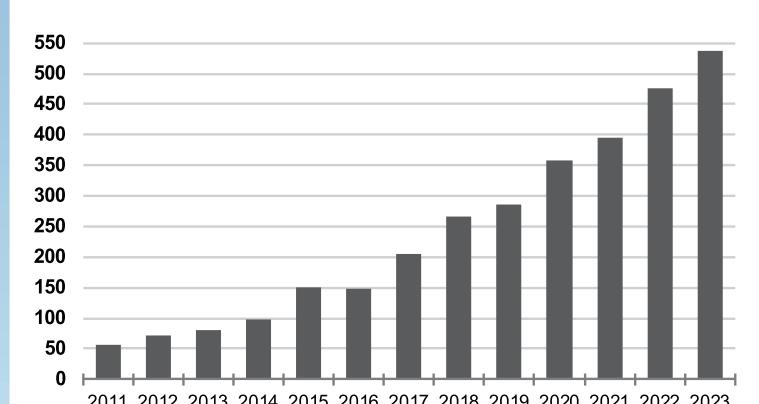




アホウドリの保全

100年ほど前、羽毛を得るために著しい乱獲によって数を減らし、一時は絶滅したと信じられたアホウドリ。研究所は、わずかに生き残っていたこの鳥を守り、数を増やすための活動に取り組んできました。伊豆諸島鳥島では、島内の安全な場所に親鳥を誘引し、新しい繁殖地を作るため、アホウドリの模型や音声装置の設置を行いました。また、小笠原諸島智島にかつてあった繁殖地を復活させるため、鳥島から雛を運び育てる試みを進めてきました。

これらの活動は順調に進んでいて、ハワイやニュージーランドで行われているアホウドリ類の保全にも活かされるようになりました。



伊豆鳥島内の新たな繁殖地（初寝崎）のヒナ数

鳥島内に新しく形成された初寝崎のアホウドリ集団繁殖地。成鳥や亜成鳥、雛が混在する（2022年3月撮影）。



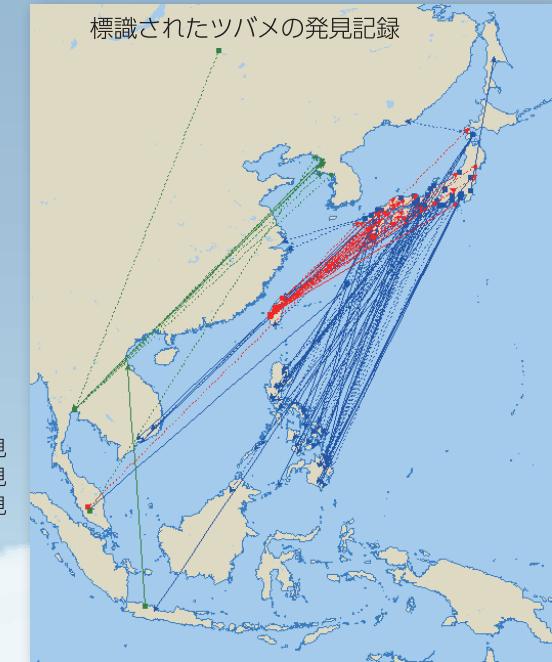
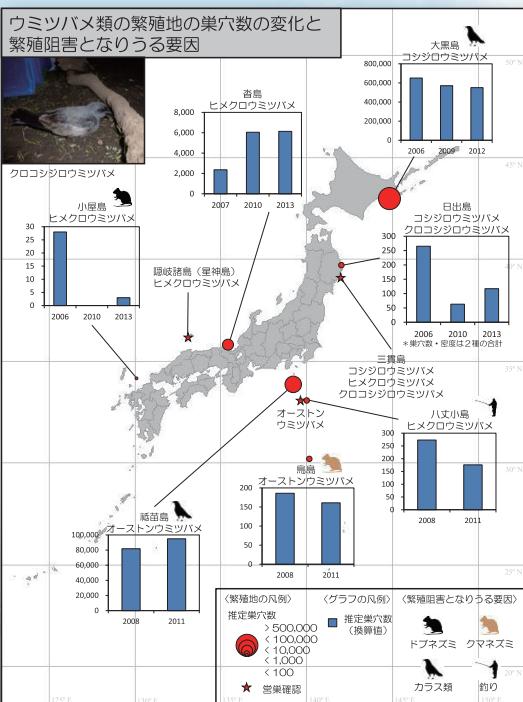
ヤンバルクイナの保全

ヤンバルクイナは世界で沖縄島にのみ生息する飛ばない鳥で、1981年に当研究所が新種として発表しました。日本における新種の鳥の発見は、実に約100年ぶりのことです、当時、大きなニュースになりました。その後、当研究所が中心となり、生態学的な調査が進められた結果、この鳥が絶滅の危機に瀕していることが判明します。その主な原因はハブ対策のためにかつて人間が島に持ち込んだマンゴースでした。当研究所ではこの世界的に希少な鳥を守るため、彼らの生態的特徴のさらなる解明に注力とともに、関連諸機関と協力し、その増殖に取り組んでいます。



鳥類標識調査 (環境省事業)

鳥類標識調査は、捕獲した野鳥に個体識別用の足環を付けて放すことを繰り返す調査です。後日、その鳥が再び発見されれば、野鳥の移動や寿命に関する基礎的な情報が得られます。この調査は先進国では広く、また、古くから実施されており、日本でも1924（大正13）年に開始されました。研究所は、現在、約400名のボランティア調査員とともに、日本全国にてデータの収集を進めています。また、当研究所では、この調査が開始されてから現在に至るまでのすべての調査記録を保管・管理しています。蓄積されたデータは公開されており、多方面で活用されています。



海鳥モニタリング調査 (環境省事業)

環境省は、自然環境の変化を早急に把握するため、「モニタリングサイト1000」とよばれる事業を進めています。これは森林、草原、干潟など、多様な環境を対象に、そこに生息する生物のモニタリングを行うもので、多くの機関・団体の連携によって進められています。研究所は、その中で島嶼環境の指標となる海鳥のモニタリング調査を担当しており、全国約77か所に設けられた調査地を訪れ、約25種の海鳥について繁殖の状況と周辺環境の変化を定期的に調べています。

※ 日本全国にさまざまな生態系をカバーする約1000か所の調査地を設定し、自然環境の変化を100年間に渡って長期観測するプロジェクト。



社会とのかかわり

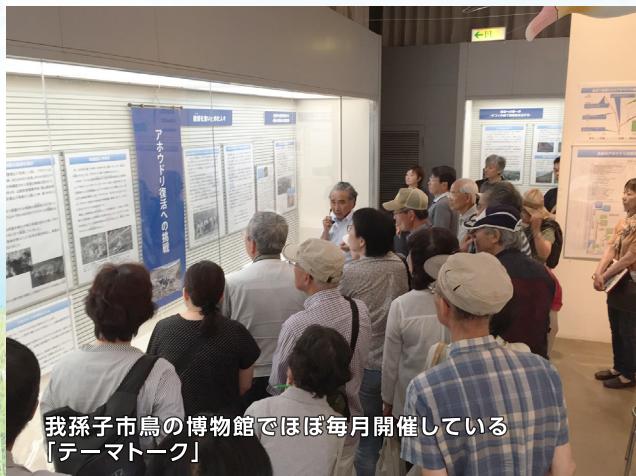
鳥類学の成果を広く社会に還元するための取り組みを紹介します。



山階芳磨賞シンポジウム（2016年9月）



山階芳磨賞贈呈式（2016年7月）



我孫子市鳥の博物館でほぼ毎月開催している
「テーマトーク」



ウェブ広報のための動画作製の様子



ジャパン・バード・フェスティバルで行われる
「山階鳥研 見にレクチャー」

山階鳥研ニュース

当研究所の活動や、鳥の話題などをやさしく紹介するニュースレターです。年6回、奇数月に発行されます。

山階鳥類学雑誌

鳥類学の研究成果を発表する場となる学術雑誌です。自然科学の論文だけでなく、鳥に関する内容なら人文社会科学の論文も掲載されます。年2回、夏、冬に発行されます。

テーマトーク

我孫子市鳥の博物館との共催イベントです。当研究所のスタッフが研究の内容を詳しく解説します。当研究所に隣接する同館にて、ほぼ毎月1回のペースで開催されます。

山階芳磨賞

鳥類学の発展に対して多大な貢献をした日本人または日本の団体を表彰しています。受賞者の功績を広く社会に紹介するため、受賞記念シンポジウムを開催します。選考は2年に1回のペースで行われます。

連携大学院・連携機関

当研究所は東邦大学大学院、東京農業大学大学院、帝京科学大学大学院と連携大学院協定を結んでいます。当研究所のスタッフが大学院にて学生の指導にあたります。

また、京都市動物園、ベルニス・パウアヒ・ビショップ博物館、我孫子市教育委員会、芝浦工業大学柏中学高等学校と連携協定を結んでいます。

ジャパンバードフェスティバル（JBF）

毎年10月末か11月初めに、当研究所のある我孫子市にて、鳥と環境をテーマにした祭典JBFが開催されます。当研究所は実行委員会メンバーであり、所長が実行委員長を務めます。当研究所では、JBFの開催期間中に次のイベントを行なっています。

(1) 鳥学講座

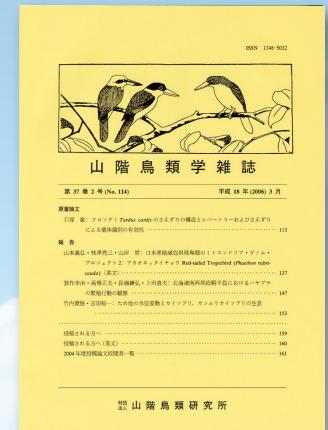
第一線で活躍する鳥類学者を招き、我孫子市のホールにて講演会を行います。

(2) 山階鳥研 見にレクチャー

普段は非公開の当研究所の建物にて、スタッフが交代で研究の紹介などを行います。



「山階鳥研ニュース」



「山階鳥類学雑誌」



山階芳磨賞のメダル。創立者山階芳磨博士の肖像と、同博士が新種記載したヤンバルクイナの図案があしらわれている。

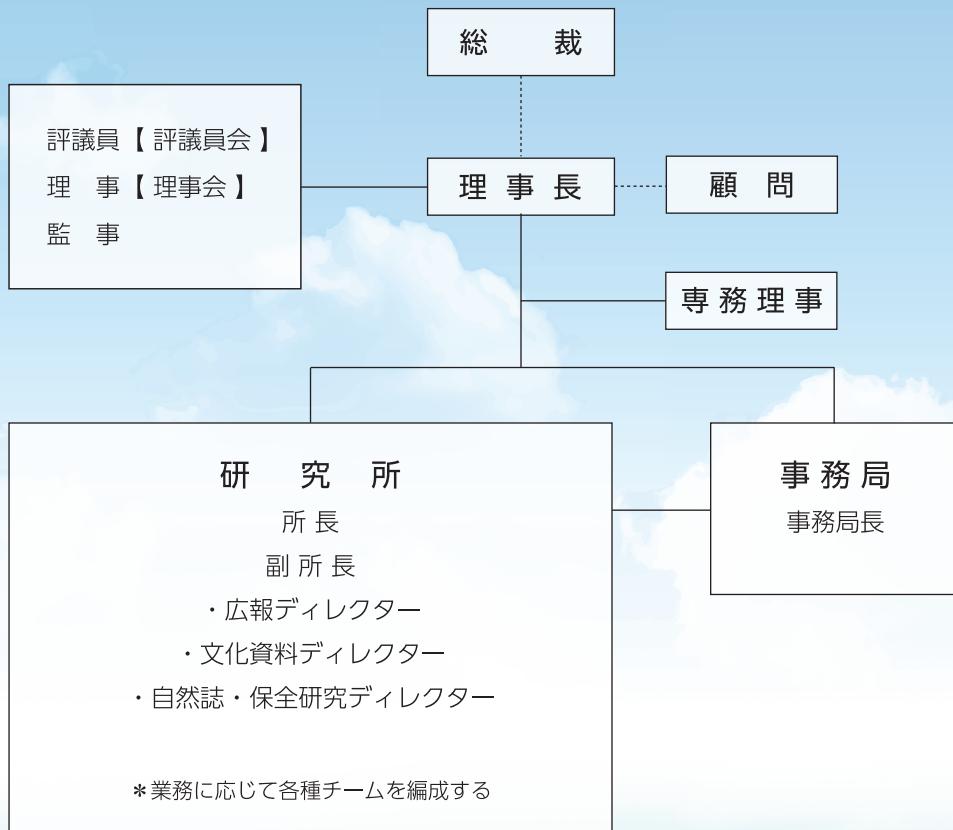




組織図

公益財団法人 山階鳥類研究所 沿革

当研究所は、1932(昭和7)年に前身の山階家鳥類標本館が設立されて以来、一貫して鳥類学の研究を支えてきました。1942(昭和17)年、財団法人山階鳥類研究所設立。1986(昭和61)年には、秋篠宮文仁親王(当時)を総裁としてお迎えしました。2012(平成24)年、公益法人制度改革に伴い、公益財団法人に移行しました。



総裁
秋篠宮 皇嗣殿下



理事長
壬生 基博



専務理事
林 良博



理事
研究所長
小川 博

*当研究所は、独立行政法人日本学生支援機構法施行令で指定された研究所等に該当する。

やましな よしまる

山階芳麿博士



やましな よしまる

当研究所の創設者である山階芳麿博士は、1900(明治33)年7月5日、山階宮菊麿王の第二王子として誕生しました。陸軍士官学校を経て陸軍に入りましたが、幼少の頃より興味を持ち続けた鳥類の研究に専念する夢を断ち難く軍を退役、1929(昭和4)年に東京帝国大学理学部動物学科選科に入学しました。

同選科を1931(昭和6)年に修了後、1932(昭和7)年に当研究所の前身である山階家鳥類標本館を設立、鳥類標本の収集を精力的に進めました。1939(昭和14)年には北海道帝国大学の小熊茂教授おぐま まさむるに師事し、1942(昭和17)年の「鳥類雑種の不妊性に関する研究」により、同大学から理学博士号を取得しました。その後は細胞核に含まれる染色体の特徴に基づいて鳥類の分類を見直す研究を進めました。

1949(昭和24)年、その成果をまとめた「細胞学に基づく動物の分類」が出版されると、その先進性が国内外から高く評価され、博士は翌年、日本遺伝学会賞を受賞するに至ります。また、博士はこれらの研究を進めるかたわら、鳥類の保全にも熱心に取り組みました。

日本鳥学会会頭、日本鳥類保護連盟会長、国際鳥類保護会議副会長、同アジア部会長などを歴任、1977(昭和52)年にはジャン・デラクール賞を受賞しました。この賞はノーベル賞受賞者K.ローレンツ博士など、わずか数名の卓越した鳥類学者にしか与えられていません。また、博士は1978(昭和53)年、「世界の生物保護に功績があった」としてオランダ王室の第1級ゴールデンアーチ勲章を授与されました。

1989(平成元)年1月28日没、享年88歳。主要著書に『日本の鳥類とその生態』(第1巻:1933、第2巻:1941)、『世界鳥類和名辞典』(1986)。その他、論文多数。



ACCESS

交通アクセス

● JR我孫子駅からタクシーで約10分

● バス「市役所」下車 徒歩約10分

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115

TEL:04-7182-1101 FAX:04-7182-1106

URL <https://www.yamashina.or.jp>



※ こちらのパンフレットは古紙パルプ配合率70%再生紙を使用、またインクは植物油インキを使用しています。



公益財団法人
山階鳥類研究所

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山115
TEL:04-7182-1101 FAX:04-7182-1106
URL <https://www.yamashina.or.jp>